

- (ii) 同 f.6 ポルフェリウス注釈断片.
  - (iii) 同 ff.8-30 ポエチウスのトピカ注釈.
  - (iv) Ms München, clm 14779, ff. 31r-36v ポルフェリウス注釈.
  - (v) 同ff. 44r-67r, 命題論注釈.
  - (vi) "Positio vocum sententiae", Ms Orléans 266, pp. 276a-278b.
- 9) Reiners 前掲書 p. 57 (訳 109 頁) 参照.
- 10) これら神学資料は次の二論文の中で独立に収集され論じられている.
- (i) A. Landgraf, "Studien zur Theologie des zwölften Jahrhunderts", *Traditio* I, 1943, pp. 183-222.
  - (ii) M.-D. Chenu, *Grammaire et théologie aux XII<sup>e</sup> et XIII<sup>e</sup> siècle*", *AHDLMA* 10, 1935/36, pp. 5-28.
- 11) W. Courtenay, "Schools and Schools of Thought in the Twelfth Century", および "*Nominales* and Nominalism in the Twelfth Century" (いずれも印刷中). C. G. Normore, "The Tradition of Mediaeval Nominalism", in ed. John F. Wippel, *Studies in Medieval Philosophy*, Washington D. C. 1987, pp. 201-217. も参照.

## 意見 初期スコラ学の諸問題と〈論理学〉の伝統

水 落 健 治

初期スコラ期には、〈ことば〉の問題に関して様々な新しい思索の展開が見られたが、それらは、古代末期以来蓄積されてきた〈ことば〉に関する様々な思想の、いわば総決算の上に成り立っていたと思われる。アリストテレスやストア派の論理学の著作はアレクサンドロスを始めとするペリパトス派やプラトン派の注釈家などによって吟味され批判されて行ったし (cf. *Commentaria in Aristotelem Graeca*), 紀元 4 ~ 5 世紀に確立されたいわゆる〈ラテン文法学〉は、ヒエロニムスの師でもある文法家ドナトゥスらが残した教科書 (cf. *Grammatici Latini*) などによる「学校文法」の形で後世に伝えられて行った。そして、カロリング・ルネッサンスの頃になると、図書

館などの整備に伴って、このような様々な著作の写本が整理されるに至り、人々は、この時期に至ってはじめて、過去の遺産をいわば「共通の出発点」とし、それを土台とし、そこから新たな思索を展開して行くという地平に到達することができたのである。いわゆる〈普遍論争〉がボルピュリオスの『エイサゴゲー』の注釈を発端として始まったこと、アンセルムスにおける神存在の〈存在論的論証〉の背後に〈文法学〉の研究が横たわっていたことなどはその実例と言えよう。彼らの著作は、このような「過去の遺産の整理・統合」の上に成り立っていたと考えられる。

ところで、〈普遍論争〉や〈存在論的論証〉など、この時代に始まった問題は、単なる〈ことば〉の問題に留らず、〈認識論〉や〈存在論〉にも関わっていた。超域的存在者としての「神」や「普遍的実在」は〈ことば〉を媒介としていかなる仕方でも認識されるのか、ということがこれらの問題において論じられたのだからである。

したがって、これらの問題を正確に扱おうとするなら、われわれは、個々の立論や主張の「隠れた前提」となっているものを明確にする必要がある。個々の立論や論証がどのような認識論的・存在論的立場を前提しているのかを知ることなしにこれらの問題について論ずること、つまりことがらを「歴史的文脈から切り離して、それ自体として論ずること」は、これらの問題の場合には、特に事態を不透明なものとすると考えられるのである。

〈普遍論争〉や〈存在論的論証〉の背後には、ふたつの異なった認識論的・存在論的前提があった。アリストテレス論理学のそれと、ストア論理学のそれである。論理学は、アリストテレスの立場にあっては「オルガノン」として他の諸学に先行するものであったのに対して、ストアの立場では、これは自然学、倫理学と並んで哲学という有機体（「動物」Diog. Laert. VII. 40 etc.）を構成する哲学の一部門にしか過ぎず、したがって「オルガノン」ではなかった（cf. Philoponus, *In Arist. Analy. Priora*, Comm. in Arist. Graec. vol. 13, pp. 6f. ここでは、論理学がオルガノンであるか否かをめぐって両者間に激しい論争が戦わされたことが伝えられている）。ストアの立場では、哲学をこの3部門のどこから始めようと構わなかったのである。また、アリストテレスは論理学を「名辞」や「カテゴリー」から始めたが、ストアの人々は、およそ「観念」*ennoema* なるものを「幻影」*phantasma* とみなし、論理学は「命題」からはじまらなければならないと考えた。ふたつの論理学は、すでにその出発点からして異なっていたのである。

以上のように、これらふたつの立場は全く異なったものであるが、歴史的経緯としては、両者は相互に影響しあいながら発展して行った。とくに前者から後者への影響には著しいものがあり、ストアの人々は自らとは立場を異にするアリストテレス論理学の影響を様々な仕方であら受けた (e.g. SVF II. 83 と *Anal. Post.* II. 99b 35ff. を比較せよ)。そしてこれら両者の立場は、内に矛盾を孕みつつも、相互に区分されることなく、混合したまま、後世の学校文法の教科書や論理学の著作の中へと流れ込んで行ったのである。たとえば、ストア論理学の基本的定義である「問答法とは、真と偽、および真偽いづれでもないことについての知識である」という命題 (Diog. Laert. VII. 42) が、論理学のアリストテレス的枠組みと共に、若干の変容を受けながら、紀元 4～5 世紀のラテン文法学者や後世の論理学の教科書に伝承されていったのはその一例といえよう。

したがって、〈普遍論争〉や神の〈存在論的論証〉などの問題を考察するに際しては、当該著作家たちのテキストを、ただそれ自体として、歴史的な脈から切り離して読むだけでは不十分であると考えられる。これらの問題の考察に際しては、個々の問題のアリストテレス論理学の伝統との関連、およびストア論理学との関連が精密に区別されなければならない。アリストテレス論理学の根底をなす認識論・存在論と、ストア論理学の根底をなすそれとのダイナミズムの中で〈普遍論争〉や神の〈存在論的論証〉の問題が見られるとき、はじめて事態が明確になるのではなからうか。

## 意見 vox と verbum

清水 哲郎

岩熊氏が現時点で知られている最先端の資料に基づいて、「11 世紀後半になってはじめて、『イサゴギーで論じられているのはもの (res) についてであるか、それともことば (vox) についてであるか』が論じられるようになり、後者の立場をとる人が *vocales* と呼ばれ、その立場の延長線上に普遍に関する唯名論的主張が現れる」